

松山幸生先生講述

# ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全33回--2

2021年9月

写者  
小原靖夫

## 第2回・キリストを証する七つの言葉

### 第1章⑤節から⑭節 御子は天使にまさる。

#### ⑤いったい神は、かつて天使のだれに

「あなたはわたしの子  
わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた  
「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」  
と言われたでしょうか

#### ⑥更にまた、神はその長子をこの世界に送るとき

「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と言われました

#### ⑦また、天使たちに関しては

「神は、その天使たちを風とし  
御自分に仕える者たちを燃える炎とする」と言われ

#### ⑧一方、御子に向かっては、こう言われました

「神よ、あなたの玉座は永遠に続き  
また公正の笏が御国の笏である

#### ⑨あなたは義を愛し、不法を憎んだ

それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油を  
あなたの仲間注ぐよりも多く、あなたに注いだ」

#### ⑩また、こうも言われています

「主よ、あなたは初めに大地の基を据えた  
もろもろの天は、あなたの手の業である

#### ⑪これらのものは、やがて滅びる

だが、あなたはいつまでも生きている  
すべてのものは、衣のように古び廃れる

#### ⑫あなたが外套のように巻くと

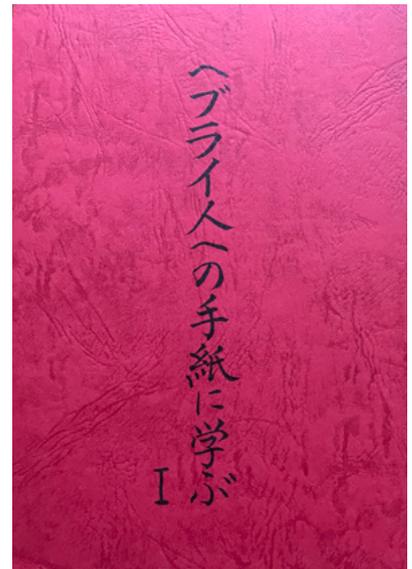
これらのものは、衣のように変わってしまう  
しかし、あなたは変わることなく  
あなたの年は尽きることがない」

#### ⑬神は、かつて天使のだれに向かって

「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで  
わたしの右に座っていなさい」と言われたことがあるでしょうか

#### ⑭天使たちは皆、奉仕する霊であって

救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために



遣わされたのではなかったですか（第1章⑤節から⑭節）

「ヘブライ人への手紙」には多くの旧約聖書の引証がなされています。今回の冒頭の七つの言葉は全て旧約聖書の言葉です。参考の為に出典を冒頭に要約します。

「キリストを証する七つの言葉」と旧約聖書

- ⑤ 「あなたはわたしの子、わたしは今日あなたを産んだ」 詩編第2編7節
- ⑤ 「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子とになる」 サムエル記下第7章14節
- ⑥ 「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」 70人訳ギリシャ語聖書
- ⑦ 「神は、その天使たちを風とし、御自分に仕える者たちを燃える炎とする」 詩編第104編4節
- ⑧ 「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また公正の笏が御国の笏である。  
あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それ故、神よ、あなたの神は、喜びの油を、  
あなたの仲間注ぐよりも多く、あなたに注いだ」 詩編第45編7節～8節
- ⑩ 「主よ、あなたは初めに大地の基を据えた もろもろの天は、あなたの手の業である  
詩編第102編26節
- ⑬ 「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまでわたしの右に座っていなさい」 詩編第110編1節

## 松山幸生先生語り始め

教会で伝道活動をしていると、いろいろなことで気になることが多いわけですが、その中の一つが、「教会で語られている福音が本当に人々の心に届いているだろうか」という問題なのです。現実の状況から言いますと、私どもこの国に住んでいるクリスチャン人口というのは、1%にも満たない状態です。ということは明らかに民衆の心に福音が届いていないということになるのかもしれない。とすると一体届かない理由は何なのだろうか、ということが考えられなければならないと思います。

ちょうどイスラエルの国も、あるいはキリスト出現後のユダヤの国もそういう意味では似かよった部分を持っていたと思います。

神の言葉は語られ礼拝は行われている。しかし人々の心にそれが届いていない。言い換えれば人々の生活を支えたり、動かしたりする力になっていないという現実が大変強くあったように思います。

それは、もう一つ違った視点からみれば、御言葉を語る者が、御言葉が語りかけられる対象と一緒に生きていないということだったのではないだろうか。高いところからものを言ったり、あるいは全然別の視点からものを語ったり、生きている現実の中であえいでいる人々の痛みを痛みとして、共に担うことをしないで語っていることが多かったからではないだろうか。

そういう時代は往々にして権威主義的な時代であったり、あるいは官僚的な力が支配したりする時代だったのだらうと思う。言い換えれば出世主義を背景にした時代を構築してしまうことになっていたのだらうと思います。

ところがそういった時代の中で、本当にとことん低いところまで降っていらっしゃって群衆といわれる人々と一緒に生きられたイエス、そのお方だけが、と言ったらいいでしょか、そのお方だけが福音を福音として語る事ができた。彼の言葉は人々の心の中に響いていった。そういうことが言えるのではないかと思います。

「神の言葉は人々の心の中に響いていかなければならない」。少なくともこのヘブライ人への手紙を書いた著者は、そういう視点に立って聖書の御言葉を味わっていったんだらうと思います。「だから多くを語るとか、自分が語るのではなく、今日の御言葉をご一緒に輪読してお分かりになりますように、ほとんどが旧約聖書の御言葉の引証であって、このヘブライ人への手紙を書いた著者自身の言葉というのはほとんど見当たらないのです」<sup>46</sup>

そしてしかも、「そうでありながら、これから学んでいこうとしているこのヘブライ人への手紙と呼ばれる文章の一番大事な基調をなしているのが、この第1章の5節から14節までの『七つの旧約聖書の言葉からの引証』ではないだらうかと思ひます。

しかも『その七つは、いずれもキリストに関する証言』なのです。

「この方こそがキリストである」。そのことを聖書が告げている言葉を引証しながら、キリストというお方はこういうお方ですよ、と先ず人々に告げようとした。そのようにこれを読んでいいのではないかと思います。

先ず第一にキリストについて紹介していくにあたって、今日の小見出しにありますように、「このお方は、天使にまさるお方である」ということを語ろうとしているわけです。

天使という言葉、今の私たちには余りなじみのない言葉ですが、この言葉は色々な意味をもった言葉です。例えば天使=アγγελロスという言葉は「遣わされた者」とか、あるいは「天からの使い」とか「御使い」などという言葉に置き換えることができる言葉なのです。一つの人格を持っている者、超自然的、靈的な存在であるというように考えられる。しかしそれは同時に、人間同様に「神によって造られた存在」であると語られるのです。

私たちは、このヘブライ人への手紙の著者が、何を私たちに語っていこうとしているのかに、一つの興味と関心を向けて、この御言葉を味わっていくことが大切だらうと思ひます。少なくともこのヘブライ人への手紙の著者は「キリストと天使とは比較することのできない異質的な存在である。すなわちイエス・キリストは神から生まれた存在であり、天使は神によって造られた存在である。従ってこの二つのものを比較することも、あるいはこの二つのものをさまざまな形で私たちが取り違えることも許されていない」そういう存在がキリストなのだ、ということ語っているのです。<sup>47-48</sup>

神のお言葉を、私たちが真剣に受け止めていこうとすればするほど、「神の聖さ」とか「神の公正さ」とか、「神の正義」というものが大きく私たちの上にのしかかってくる。

更に、その重さを本当にしっかりと受け止めようとする、私たちのもっている罪とか、私たちのもっている曖昧さとか、いい加減さとかのゆえに（腰砕けになって、反って）神からどんどん遠ざかっていってしまう、そして、神の愛とか赦しとかが見えなくなってしまうという現実が起こってくるわけです。

そういう中でユダヤの人たちは「決定的な人間の罪の性格と、神のもっている聖い性格を取り結ぶ存在として、『天使』というものを考えたのではないか」。言い換えれば、神の聖さを私たちに伝え、私たちの神への訴えを神に向かって運んでくれる存在として。

だから「神と私たちの間を行き来するために『天使は羽根を持っている』」。すごく面白い発想なのです。その羽根によって高いところから低いところまで来てくれる、低い所から高いところまでまた登ってくれる、言い換えれば「私たちと神との間を結ぶ仲保者なのだ」という考え方。しかし仲保者であるにしても、その天使は造られた者ですから間違いを犯すこともあるのです。そうすると神から天使である権利を剥奪されてしまうことも起きることが聖書の中にも出てくるわけですが、いずれにしても神が私たちのために与えてくださった存在として天使というものを捉えている。

ある時代にはそういう神によって造られた非常に明確な存在として人間と天使とを位置づけた時代があったようです。

それは、「人間」はエデンの園の木とか草とか生き物とか形あるものを統治するように、神から、責任委譲を受けた。「天使」は形のないもの、風とか炎とかを、神に代わって支配するように権利委譲を受けたということです。だから、目に見えるものを私たちが追い求めて、行き詰まった時には、目に見えないものによって神を知らせてくれるものが天使の仕事であって、そういう意味で、天使は私たちに神の愛を伝える大事な意味を持っていたのだと考えられたわけです。

私たちが滅びそうになった時、目に見えない力で私たちを支えてくれる、神の霊を運んでくれる、だから私たちを守るのは天使なのだという形で「守護天使」というものが当然話題になって来る。そんなことが繰り返されてきたのだと思います。いずれにせよ正しい聖書理解でいけばそういう二つの存在、人格を持った人間と天使という存在があってもいっこうに差し支えない。神は自由にお造りになったわけですから。49

さまざまなものを神は責任委譲して、支配すること、統治すること、管理することをお命じになった。人間は天地万物のうち、形あるものの支配を委ねられた。天使は形ないものの支配を委ねられた。だから勝手気ままに吹いているようであるけれど、風はある限度をもっていて、人間をことごとく滅ぼし去るようなことはない。気温がいくら上がっても、人間が全部焼き尽くされてるようなことはない。どんなに冷えても、すべての人が凍え死ぬようなことはない。それは神が天使を使って、それをコントロールしているからだという考え方があっても不思議ではないのです。

天使礼拝又は「恵み」の礼拝への警告

そういう考え方を始めたわけですが、だんだん人間はずるくなって、その絶対的な力を持ったお方よりも、身近で私たちに慰め励ましてくれるもので満足して、その中で姑息に自分の人生を考えるようになっていった。そこでは神ではなく、自分を助けてくれる方にいい顔をして、その方を誉めそやし、その方によってたくさん利益を得ようとするようになった、というのが「天使礼拝」の起こりなのです。

それは私たちがいま、「神礼拝」と呼んでいることの中にも深く入り込んでいるだろうと思います。「神の何を礼拝しているのですか」といったら、神ご自身ではなくて、「恵み」を礼拝している。自分自身が与えられた幸いを神に向かって讃美している、あるいは自分に与えられているたくさんの恵みに対して感謝をしている、恵んでくださった神に対してではなく、恵まれたものを感謝している、というような形になっているとすれば、それは「異なる形での天使礼拝であるわけです」。自分を幸いならしめてくれる力に対して、私たちが感謝し、讃美をしているとすれば、それはこの時代にうたわれていた天使礼拝とそんなに変わらないのではないだろうかと思います。

イエスと天使の違い・真の神礼拝とは

結局イエスと天使がどう違うのかということです。

ヘブライ人への手紙はそういう意味で非常に熱心に語ります。

言い換えれば「本当の神礼拝とは何なのか」ということをこの箇所を通して語っていきこうとしています。しかも理屈をこね回すのではなくて、旧約聖書の中にこう書かれていますよ、神はそのように私たちにお告げなっていますよ、ということを変えていねいに語っていきこうしているのです。

そこで少しずつ今日の箇所について多少丁寧に見ていきたいと思うのですが、まず第5節の前半です。

その前に蛇足的なことですが「神は言われた」という言葉が繰り返し繰り返し出てくるのです。神は何々と言われた、神はかくかくしかじかと言われたという形で、前半の部分というか1章の後半の部分、5節から14節の中では繰り返し繰り返し書かれているわけです。神がおっしゃった、言い換えれば、これが聖書の真理なのだということを著者は一生懸命に伝えるのです。あなた方がどう考えるかわからないけれど、これこそが聖書の真理なのだ。51

第5節は

「いったい神は、かつて天使のだれに、『あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ』と言われ、更にまた、『わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる』と言われたでしょうか」

前半は、「あなたはわたしの子、わたしは今日あなたを産んだ」と言われている。そういう書き出しです。これは、詩編の第2編7節の御言葉なのです。「キリストのメシア預言

と、この箇所は言われています」。この記者はこの御言葉を先ず第一に置くことによって、キリストが神の子であり、神がキリストを産だのだということを強調しています。

主、あるいはメシアという言葉はヘブライ語ではもともと「油を注がれた者」という程度の意味で、王様とか祭司というものを指していて、直接、救い主を意味していないことの方が多いのですが、「ここでは、このメシアという言葉、主と呼ばれる言葉は、天使たちや人間のような被造物、神によって造られたものに対してではなく、神によって産み出されたもの、神の子、直系の子に対してであるということをはっきりと明らかにしているわけです」。

この詩編第2編の7節だけをここでは引証しているわけですが、実はこのことを引証することによって、ヘブライ人への手紙の著者は、詩編の第2編を全体的に取り上げてメシア預言というものを訴えていこうとしているのです。詩編の第2編1節から少し読んでみたいと思います。

#### 詩編第2編

- ①なにゆえ、国々は騒ぎ立ち、人々はむなしく声を上げるのか。
- ②なにゆえ、地上の王は構え、支配者は結束して主に逆らい、主の油注がれた方に逆らうのか。
- ③「我らは、枷をはずし、縄を切って投げ捨てよう」と。

言い換えると、この世のすべての力が、メシヤに対しては反抗している。ということが謳われます。4節から12節

- ④天を王座とする方は笑い、主は彼らを嘲り、
- ⑤憤って、恐怖に落とし、怒って、彼らに宣言される。
- ⑥「聖なる山シオンで、わたしは自ら、王を即位させた。」
- ⑦主の定めたところに従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。  
「お前はわたしの子、今日、わたしはお前を産んだ。」
- ⑧求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし、地の果てまで、お前の領土とする。
- ⑨お前は鉄の杖で彼らを打ち、陶工が器を砕くように砕く。」
- ⑩すべての王よ、今や目覚めよ。地を治める者よ、諭しを受けよ。
- ⑪恐れ敬って、主に仕え、おののきつつ、喜び踊れ。
- ⑫子に口づけせよ。主の憤りを招き、道を失うことのないように。  
主の怒りは瞬く間に燃え上がる。  
いかに幸いなことか 主を避けどころとする人はすべて。

「メシアという存在がどんな存在であるかをこの詩の中では謳っています。今の詩の中で「お前」と言っているのは、正に神がキリスト、自分の産んだ独り子を指しているわけです。そういう詩編をもってきて「メシヤの主権性」、それをこの時代の執行者に強調しようと願っている。そんなことがこの箇所から読み取ることができると思います」。

またこの第2編は終わりの方にも告げられていますように、「終末の日に対する神の大きな慰めの言葉を私たちに与えているのです」。終わりの方の第8節以下でもその辺の部分をご覧になると分かりますように「神は『終わりの時』には、あなたにわたしの国を嗣業として委ねる」。

言い換えれば、イエスがすべての国を統治なさる。そしてあらゆるものが主ご自身の手によって支配されることになる。神に背くものはすべて彼の杖によって打ち砕かれ、悪は完全に滅び去る。だから「主を畏れ敬ってこの方にお仕えなさい」ということをしっかり書いているわけです。

私たちはそういう一つの視点、旧約聖書がもっている視点をきちっと踏まえていかなければならない。言い換えると、イエスが来られて、再び天に帰られた後、おいでになるそうだと、その時には裁きが行われるということだという想像や空想で終末の日を捉えるのではなく、正に詩篇の詩人たちが遠い遠い彼方に起こる事柄をしっかりと見据えて預言したように、この言葉に対してしてしっかりとした信仰をもって受け止めていくことが求められているのではないのでしょうか。

少なくともヘブライ人への手紙の著者は、そのことを非常に強く自分自身の中で位置付けながら「このことこそが神が私を造ってくださったという告白であり、神がすべての全てをご所有なさるお方である事を証する道なのだ、神の全知全能とは正にこういうことなのだ」ということを語ろうとしているわけです。それは「イエスこそ神の子である、御独り子なのだ」という信仰がこの詩編の中に、すでに二編の中にはっきりと謳われていることを引証しながら、先ず、イエスが神の子であることをヘブライ人への手紙の記者は力強く証したわけです。

この（ヘブライ人への手紙第1章）第5節の後半、「更にまた、『わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる』といわれたでしょうか」という二重の『』の部分はサムエル記下の7章の14節の御言葉です。

預言者ナタンがダビデに王としての祝福とその王国の王座の約束をした場面なのです。その王座がとこしえに続くという預言の成就是ダビデ、ソロモン王に始まる長い王朝系列の子孫がキリストにおいて完成されるという、遠大な計画をもっていると見てよいと思います。

ダビデに始められた神の主権は、この地上にある被造物の手を通して次々に受け継がれ、究極的にはすべてを超えて神ご自身が、被造物としてではなく、ご自分の御子してお産みになったイエスによって完成されるのだということを告げていると言ってよいのです。キリストがすべての者の王として誕生することを、主はナタンを通して千年以上も前から約束していたと言ってもよいと思います。

そのように約束されたキリストと、既に存在し働いている天使とは比べものにならないと、ここでこの著者は私たちに訴えているのだと思います。それに続く箇所では、イエスが神の子であり、父と子の関係に置かれていらっしゃるお方なのです、ということをはっ

きり述べて、その意味で天使ではない、被造物ではない、キリストの優越性を非常に強く訴えていると言ってよいと思います。55

## 第6節

更にまた、神はその長子をこの世界に送るとき

「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と言われました。

この6節の言葉は、申命記の32章の43節、ヘブル語訳ではなく、「七十人訳のギリシャ語の聖書」を用いて引証しているわけです。

ここでは、いまお読みになってはっきり分かりますように、「礼拝の対象としてのキリスト」をきちんと位置づけ、天使はキリストを礼拝する存在にしか過ぎないということを語っています。まさに私がそう思っているのではない、私個人の信仰がそうだと言っているのではない、これは神が私たちをお造りくださってから今日に至るまで、私たちに神ご自身が語られた約束なのだということを強く訴えて、神がこうこうこうと言われた、というふうに書いているわけです。

当時のユダヤ民族の慣習の中で書かれているわけですから「家督の権、父親の持っている一切の権能を譲渡されて、それを執行することができるのは長子に限る」と言われているわけです。ですから「神は長子を」と書いてあるのは、御独り子イエス・キリストということを行っているに過ぎないのです。56

神に何人も子どもがいて、その一番上だったと言っているのではない。下手をするとこの長子と書いてある言葉を見て、神には何人も子どもがいて、イエスでないものもいたのではないかと言い始めるわけなのですが、ここでいう長子というのは「神の権能を委譲する存在としてお産みになった子」という意味です。

そのお方はイエスご自身でしかなかった。他には誰もいないわけですから、この長子という言葉に幻惑されなくて、長子= イエスというように捉えていただければいいわけです。それ以外に神はご自分のお子様をこの地上にお送りくださったことは一度もなかったということになるわけです。

その長子という言葉で言われていること、それは別な言い方をすればインマヌエルという名前と呼んだ存在であったかも知れないし、時にはメシヤとか、ヨハネによればロゴスという言葉で呼ばれている、またキリストと呼ばれている、色々な形でこの長子という言葉は解釈されていくわけですが、少なくとも神によって産まれたもの、神から遣わされた神ご自身と変わらざる存在ということを語っているに過ぎないわけで、長子という言葉で振り回される必要はないだろうと思います。

先程の5節の後半の方でもいわれていましたが、神とイエスとの親子関係、これは神の独り子ということが自然である、極めてはっきりとした形で述べられているわけですから、

長子という言葉に神の独り子というように捉えていくことが理解しやすいのではないかと  
思います。

「独り子というのは、他の誰よりも父なる神に近い、言い換えれば、父なる神が礼拝される時、共に礼拝されている存在なのだということなのです。仕える存在といっても、父に仕える存在ではなくて、父の代行者として、父と共にある存在、それがイエス・キリストなのだ」ということになるのです。57

この辺の論議が私たちの中できっちりと位置づけられない限り、三位一体の信仰は非常にあやふやなものになって来ます。「父なる神、子なる神、聖霊なる神」といった時、神は三体おられるのではないかと考えてしまう、そういう危険性をもっているわけで、その辺のところを整理していかねばならないと思うわけです。

ここで「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と書いてあるわけですが、「礼拝する」(プロスクネオー)という言葉は、「天使たちよ、あなた方は皆、この方の前にひれ伏しなさい」というようにとることのできる言葉ですし、その「ひれ伏す」という言葉そのものは、形の上からいうと、ひざまずいて、頭を地面にすりつけて拝むという姿を表現しているわけ  
です。

そういう行為、言い換えれば「自分が最も小さい卑しいものになってしまい、自分自身は敵がどこから攻めて来ても自分を全く防備できない状態、そして自分自身が本当に相手に対してすべて委ねてしまう状態」、そういう姿を「ひれ伏す」(プロスクネオー)という言葉の中で現しているのです。58

そしてここでいう、礼拝とはそういうことなのです。ところが私たちは礼拝する時に「身構える」のです、「ひれ伏す」のではなく一体何が言われているのだろう、牧師は何を言うのだろうと身構えて礼拝の説教を聞くのは、それはひれ伏しているのではないのですから、礼拝していないことになるのです。そういう私たちの日常の在りようというものも、この言葉を通して少し考えさせられることになるわけです。(猛反省です)

私たちは本当に神の前に捨て身になって、自分自身のすべてをかなぐり捨てて、神を神としているのだろうかということになると、どうもそうではない。神を礼拝することは、自分の要求を神に押しつけることになっていたりということがあれば、正に礼拝をしていないわけで、「天使たちよ、あなたがたにも言い分はあるだろうけど、一切そういうものは通用しない。ただあなたがたは虚しくなって神の前に頭を地面にすりつけて、膝をかかめて礼拝しなさい。拝みなさい。そうするのがイエスをキリストとすることなのですよ」と語られているわけです。私たちはそういう神礼拝の在りようというものまで、この部分から教えられていると思います。

第7節、

⑦また、天使たちに関しては、

「神は、その天使たちを風とし、御自分に仕える者たちを燃える炎とする」と言われ  
この引証は詩篇の第104編の4節の言葉です。<sup>59</sup>

この言葉をここに著者が置いている理由として、「イエスの主権性」あるいはイエスが  
もっていらっしゃる優位性というものをきちんと位置づけて、そのことから、天使がもっ  
ている神に仕えるものに過ぎないという性質、そういうことをここに示しているのだらう  
と思います。そして、その神に仕える存在でしかない天使を、これから少し紹介していき  
ます。それがこの7節であるだらうと思うのです。

天使は神によって人格を失う場合もあるし、自然の力に過ぎなくなることもさへある、  
御子はそうした一つ一つの事柄に対して具体的に臨まれて、この天使たちが御子に仕える  
ことを求めておられる。即ち、天使というのは御子に仕える存在に過ぎないのだ、とい  
うことをここで語っているわけです。天使たちに、「神を礼拝せよ」と命じ、さらに続いて  
「天使たちは自分に仕える者たち」という言葉で表現して、神ご自身が「天使というも  
の、人間と同じように神に仕えるために造られた存在なのだ」と位置づけているのです。  
「御子の命令を風のように速く、風よりも早く伝える伝令に過ぎない。あるいは人々の風  
聞に左右されないで、神の正義を実行する燃える炎のような役目を持っているのだ」と  
いうことを「神はこの天使たちを風とし」と表現しています。

風と言うのは速さですね、「燃える炎とする」というのは、あらゆるものに支配されな  
いで、すべてのものを焼き尽くしてでもその事柄を伝えていこうとする、神の熱意を伝え  
る存在であることを語っています。<sup>60</sup>

天使は神の近くにいて風や炎のように力を持ってはいるけれど、神の赦しの中においての  
み、そのことを行使することが許されているということになると思います。天使というも  
のが何となく茫漠としていた時代の中で、このヘブライ人への手紙の著者は天使というも  
のをしっかりと捉え、こういう存在だよと説明しているわけです。

それは別な言い方をすれば、「私たちが救い得るお方はイエス以外にはないのだ、どん  
なに天使が一生懸命になっただって救う力は持っていないのだ」ということを言おうとし  
ているのです。

第8節、

一方、御子に向かってはこう言われました

「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また、公正の笏が御国の笏である。

8節になりますと、「一方、御子に向かっては、こう言われました」と、今度はまたイエ  
スについての言葉に変わります。

「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また公正の笏が御国の笏である。」というこの言葉  
は、詩篇の第45編の7節が引証されてここに書かれています。<sup>61</sup>

ここでは再び、キリストが主であり神であることを示すことになるわけで、この言葉は新約聖書の中にも最も多く引証されている言葉ではないかと思えます。キリストが神と呼ばれている、「非常に明確に神と呼ばれている箇所である」という意味です。

先ず最初に「神よ、あなたの玉座は」という呼びかけの「神よ」という言葉は「メシアよ」という呼びかけと同じものだといってもよいと思うわけです。そしてここでは、神とあなたというのが区別されないで使われています。父と子とは一つなる神であるということを考える、そういう発想から「神、メシヤ、独り子」が一つになって全く唯一の人格として捉えられているのです。メシヤと神とは全く同じ権威をもっておられるお方である。別な箇所には、「あなたは、天地を神がお創りになった時にはその傍にいた」と謳っている箇所もあるわけですが、正にイエスというお方はそういうお方なのだとすることをここでは語ろうとしています。この玉座の永遠性とか、正義と公平に満ちている姿、そういうものがこの8節あたりでは非常に強く訴えられます。

#### 第9節

あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それ故、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの仲間に注ぐよりも多く、あなたに注いだ」

キリストが地上で歩まれたその歩みを具体的な形で語ろうとするわけですね。イエスはこの地上においてになって義を愛し、不法を憎まれた、そして喜びの油を注がれ、メシヤとして君臨なさった。そのお方が歩まれた道は正に受肉の時から始まって、十字架、復活、昇天というプロセスを経て、神の右に座られたお方なのだとすることが告げられています。<sup>62</sup>

#### 第10節から12節

またこうも言われています。

「主よ、あなたは初めに大地の基を据えた。 もろもろの天は、あなたの手の業である。これらのものは、やがて滅びる。 だが、あなたはいつまでも生きている。

すべてのものは、衣のように古び廃れる。

あなたが外套のように巻くと、これらのものは、衣のように変わってしまう。

しかし、あなたは変わることなく、あなたの年は尽きることがない」

今度は別な詩編が引証されています。詩編の第102編の26節から28節です。この箇所ですが、これはバビロンの捕囚後期、大変大きな苦難と悲しみの中にあってシオンの回復を待ち望ながら過ごしている人々、そういう人々が本当にヤーウエを礼拝することができるようという祈りをもって、この詩人が謳っていく歌なのです。正に望みを持つことができない現実の中で、神は私たちが回復してくださる。神のみが救ってください。そのお方が私たちの側にいてくださるということを真剣に訴えて、だから神に帰ろうじゃないか、この神を礼拝し続けようじゃないかと訴えていくところなのです。

恐らくこのヘブライ人への手紙の著者も、その詩人たちの思いとか、祈りとかと全く似た思いをもって、この御言葉を引証しているのではないかと思います。天も地も主が創造された。だからまた主によって滅ぼされることもある。天も地も寄り頼むに値しない、ということがここでは言われるわけです。私は、日本的な信仰というのですか、日本人的な発想とかが、日本人だけでなくユダヤ人たちも全く同じだったということに、この箇所を読みながらびっくりするのです。63

山の、あのどっしりとした姿を見た時に、これは変わることがあっても滅びることはないのだとして、人々はそれに依存しようとする思いが非常に強くなっていきました。だからある詩人は「山が動かないように、あなたも動かない」と謳うのです。実は逆なのです。

「あなたが動かないから山も動かないのであって、あなたがそれに対して怒りを発すれば山は溶けて去る」と他の詩人が謳っているように山は不動なものではないのです。

神の恩寵と保障の中で、神の赦しの中に置かれている時には、私たちには近づきがたい程の峻厳さをもってどっしりと構えている存在であっても、神が「あれはもう滅びてもいい」と言うと、それは全く跡形もなく消え去ってしまうような存在でしかないのだ。あなたがたの心はその山に向けてあるのか、山をも滅ぼすことのできるお方に寄り頼むのか、一体どっちに寄り頼んでいるのか、このヘブライ人への手紙の中では大変強い主張として出てきているのではないのでしょうか。

序論的なところでありながら、1章の5節から14節までは、ヘブライ人への手紙の内容のほとんどにふれているわけです。

そういう神のもっていらっしゃる大きな力、大きな恵みを本当に私たちはしっかりと捉えていかなければいけない。勿論、私たちはこの詩編第102編とは、「神の栄光を讃える詩」と考えて読んでいくわけですが同時に「メシアの預言をしている詩」なのだと考えて、丁度、ヘブライ人への手紙の著者が取り上げたように、この詩を読んでみることも大変大切なのだと思います。

「キリストを主と呼ぶ、そして主として受け止め、理解する」 そのことが大事な意味を持っているのだということを、この「旧約聖書の御言葉を用いながらヘブライ人への手紙の著者は訴えるわけです。旧約聖書の理解のしかたは、神の栄光を讃える詩として、この第102編を読んで終わってしまうのではなく、キリストの力がそこに示されているのだ、として読んでいく読み方をするならば、私たちは正に旧約聖書を福音的に理解していることができるのではないかと思います」。

律法の世界において起こった事柄を、福音の世界においても一度捉え直していくという作業を、御言葉を味わいながら進めてゆかねばならないことが、ここで示されているようにも思うのです。65

そういう神学的理解に立って第二章以下は記されていると考えてよいと思います。そういう立場から、キリスト者の倫理とか、実践とかいう勧告が具体的に述べられている、それがこのヘブライ人への手紙という一つの巻物、書物のもっている意味なのではないかと思えます。

主の存在の永遠性と、滅びゆく人間の地上での生活を対峙させながら、第二章以下ではその事柄について触れていこうとしているわけです。

それは今ここで言っているように、あの不動に見える山でさえも神の言葉によって滅び去り、消え失せてしまう時がある。神のもっている言葉はそれほど大きなものだということをしっかりとらえて進んで行かねばならない。とすれば、人間の命など取るに足りないものだということになるわけです。何千年何万年と変わらない山があると信じていても、その山でさえ一瞬にして神がいらないと言われれば消えてしまうわけですから、私たちの命などもっともっと小さいものだということになるわけです。

ところが、その小さな私たちの命に目を留めて、愛してくださっている神の愛の大きさ、あるいは鋭さというものに同時に私たちが目を向けていくことも、すごく大切だなと思えます。

### 第13節

神は、かって天使のだれに向かって

「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座っていなさい」と言われたことがあるでしょうか。

この言葉はやはり大切な言葉だと思うのです。これは詩編の第110編の1節の引証です。イエスもこの言葉を引証なさっているのですが、「ダビデがわたしに対して、わたしを主と呼んだ」とイエスはお感じになった。「誰がわたしを主と呼んだか、ダビデさえもそう呼んだではないか」とおっしゃっている部分があるのです。そういう引証の仕方はキリストの王としての勝利の姿を高らかに謳っている。そういう預言の言葉なのです。

多少蛇足になりますが、「あなたの敵をあなたの足台とするまで」と書いてありますが、この部分は私たちには捉えにくいですね、それは当時の詩編が読まれた時の習慣として、2つの国が戦った時、勝利をした王様は相手の王様を倒して、その首に足をかけて勝利の宣言をしたのです。ですから、あなたの頭を私の足台とするということは、完全な勝利をおさめて、自分が代わって王位につくということを表現する意味で、この言葉が使われています。日本には、そんな習慣がないんですから、読んでも何のことかわからないことが多いのですけれども、そういうことを言っているわけです。

ですからイエスがサタンに対して徹底的な勝利をおさめ、彼を打ち据えて、その上にご自分の足を乗せて勝利の宣言をなさる、その時……にということなのです。

その日まで神の右。右というのは、当時の王様の右というのは一番高い位、王様の次の者がつく一番高い位ですから、私の次の位、私に代わる者、私の代行者として私の傍に立っていなさいとおっしゃった。67

ですからこの部分をもう少し砕いた形で言えば、「再臨によって世界が神の裁きを受けた時にはイエスと神とは全く合一してしまう。それまでの間、神の意思を代行するものとしてイエスはこの世に遣わされて、神の右にいる存在として、神の代行者として、神のわざを私たちの間に示してくださるお方なのだ」と言っているのです。

そして「終わりの時には、もはやキリストは創造者であり、裁き主であり、しかも救済者であるという一つの人格として、神の中に合一された形でお立ちになるのだ。神が最後の勝利をおさめるまで、わたしの右に座っていなさい」と神は言われたのです。

「神はイエスに対してそう言われたけれども、他の天使にはそのようなことは言っていない、天使はあくまでも仕える者であるから、神の代行者だとは言っていない」というのがこのヘブライ人への手紙のこの部分で語ろうとしている中身なのです。

ということは、どんなにこの時代は根強く「天使礼拝」がなされたか、ということです。そしてこういう状況というのは案外、困難の中では起こってこないのです。

ちょうどイエスが昇天なさり、初代教会が生まれて約60年ほどの時が経った、1世紀の終わり頃で「使徒教父たちの時代」になるわけです。使徒と呼ばれた人たちはほとんど死んでしまっ、2代目3代目になってくるという現実があるわけです。そして激しいネロの迫害のようなものも一応は終わった、ほっとした安定期なのです。その安定期に入ったイスラエルは、パウロの熱烈な聖霊運動、リヴァイバル運動もなくなったし、ユダヤ人との人種問題、キリスト教とユダヤ教の対立も一応は解消されたという形で、教会が存続できるようになったのでほっとした一面を持っていました。

この頃の社会状況というか、ユダヤの状況について山谷省吾さんが書いた面白い文章があります。

「彼らはそういう状況であっても社会不安をもっていた。社会不安の中にいる彼らの現状は信仰的に見ても甚だ憂うべきものがあった。信仰における喜びを経験することがうすく、信仰をもって世に打ち勝つには足力がなく、日々の生活の圧迫の中に気力が衰え、うみ疲れ、忍耐に乏しく、信仰の後退を示し、時には集会を止め、信仰以前の生活に転落しようとしていた」と書いてあるのです。(山谷省吾・末尾に略歴を表示)

今日の教会の現実を考える時に大変似ている部分があるのではないかと思います。

信徒一人一人が「キリストによって救われた」という、その福音によって生かされている喜びを本当にしっかり持っているかということ、そうでもない。信仰によって打ち勝っているかということ、案外そうでもない。「神を待つ」なんていうことも余りしなく、大変せっかちになり、身近な解決で事足れりとしてしまうような行き方が蔓延している。とすれば正に、ヘブライ人への手紙を書いた時代と今日とは非常に酷似している。そういう状態にあるのではないかと思います。

迫害に遭うこともないし、今、「クリスチャンです」と言っても別に世の中に抵抗があるわけではない。熱くもなく冷たくもなく、毎日の生活の中で、何となく信仰を持っている

のかなというような、あるいは信仰があれば少しはよいことがあるのではないかな、という程度の信仰を持ち続けていながら歩いている。69(私への警告。づばり！グサリ！です)

今日の教会が「ここにしか救いがない」と言い切ることができる熱烈さというか、明確な信仰というか、イエスがおっしゃった言葉でいえば、「イエスこそが道であり、命であり、真理である」ということを、はっきりこの世に向かって宣言する力を持っているのかというと、案外「こちらの道の方が少しはいいのではないですか」という程度になっている。「ここにしかない！」と案外言えないのではないか。

もっとすっきりした表現でいえば、「教会にしか救いはない」というと「それはおかしい、神はどこにでも行って救っていらっしゃるのだから、どこでも救われるのだ」みたいな言い方を返されてしまう、そういういわゆる妥協的な神学といたらいいか、信仰というものが世の中にたくさん出て来てしまっているのではないかと思います。70

松山幸生先生のこの毅然としたお言葉は私の魂を悔恨へと導く。私のことをずばり突き刺される、真実を露わにされて、アダムとエバのように隠れたいという思いです。それと同時に「お前はどこにいるのか？」と探し出して頂きたい思いです)

#### 第14節、

「天使たちは皆、奉仕する霊であって、救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために、遣わされたのではなかったですか」

こういう時代の中で私(松山先生)は、このヘブライ人への手紙のもっている特色は、そういう時代だからお前たちは駄目だと上から決めつけていけないことだと思うのです。むしろそういう叱責の言葉を向けるよりも、どうやったらこの人たちは勇気づけられて本当のものに出会ってくれるだろうかと非常に忍耐強く考えながら先ず最初に、神と出会うための妨げとなっている「天使」というものを、「天使は神と同じじゃないんだよ」と聖書は言っているのだと丁寧に説明して、それだから、あなた方はこういう生活をしていかなければいけませんよと2章から語っていきこうとしているのです。

「今あなたがたが手軽に傷を癒している、そういう癒し方を止めなさい、そうではなく本当の傷が癒される道がある。それを見出しなさい」と優しく呼びかけている、そういう仕方で書かれているのだと思います。この意味ではこのヘブライ人への手紙は「慰めの手紙だ」と思うのです。

しかも聖書の御言葉をいつもしっかり捉えながら、あなたがたの先祖がそのように神から愛され、そのように神から扱われ、そのように神によって救われて来たのだから、同じようにあなた方も祝されているんですよと語りかけている。そういう在りようというものをこの御言葉の中から学んでいけるのではないかと思います。(松山先生の特徴的な語りの切り口)

誘惑とか腐敗とか墮落とかという状況は「神との関係の欠落」から起こって来ます。

「神との関係の欠落」というのは緊張感を失った生き方、神の前に厳しく立つことを止めてしまった生き方から生まれて来ます。世の中の人はずれが平安だと考えています。内的

な緊張がなくなること、言い換えれば、人々は外的な安定感をもって時を過ごすことこそが平安なのだと思いますが、本当の平安はそうではないのです。

「お前」と呼びかける神の前に立って、何が語られるのかを緊張をもって聴き続ける中で、私たちの平安は与えられていくのです。<sup>71</sup>

ところがどうもそうではなく、自分はもうこれでいいのだ、殊更、今更、神の言葉を聴かなくても、神のことは、いっぱい知っているから、それでいいのだ、というようなかっこうで、神の御言葉を分かりきったものとして、緊張をもって御言葉の前に立たない姿の中から、結局は誘惑とか腐敗とか墮落とかが生まれて来るのではないかと思います。

ですから一応今は安定して、すべてがこれで片付きましたと言っている時が、本当は一番危ない時なのだ、ということを私たちは何時も覚えておかなければいけないと思います。

神はこの世の中をこのままでいいと決してお思いになっていないのです。裁かなければならない世の中だといつも思っているから、そういう裁かれなければならない世の中に、私たちは今、生きているのだということをしっかり踏まえておかなければならない。(松山幸生先生のこの断定的な語りに呼び起こされる)

ともすると裁かれなければならない世界の次元に、「自分がうまく合致したことで安心すること」が起こって来ますから、そういう部分を何時でも目覚めさせられながら歩いていくこと、それが大切なことではないでしょうか。

ヘブライ人への手紙を学んでいく時に、そういうところを私たちが気をつけながら学んでいくことが大切だと思います。

天使というものは慕わしいものです、何故かというと被造物の一つですから。自分たちと同じように力の限界を持っていますから。割合に簡単に自分たちを慰めてくれて、不都合があっても「いいよ、いいよ」と言ってくれるのです。<sup>72</sup>

ところが絶対的な神は不都合があったら絶対にノーというのです。ノーといわれたらもう駄目なのです、「嫌な奴」なのです。私たちにっては不都合なことは言わない方がよいのです。

最近の誤った育児書は、子どもに対して親が拒否すると、子どもはそのテンションを感じて親に従わない子どもが出てくるとか、弱い子どもになるとか、おずおずとした子どもになるから親は子どもが言ったら何でも受け入れてやりなさい、そのことが大きな愛に育まれた子どもになるなど書いた本があるわけですが、そうやって育った子どもがみな他人に対して嫌がらせをやっているわけです。自分が嫌がらせをされたことがないので、その痛さが全然わからないのです。テンションがなく育つということは決してよいことではないのです。自分にとって不都合があることの方が、ある意味では一人前に育っていくためには必要なのです。

だから神は私たちに対しては不都合をたくさん用意してくださっているのです。そういう言い方は、おかしいのかも知れませんが、私たちは欲望に生きようとしますから、神はそれに対して何時でもノーとおっしゃるのです。ノーということは不都合なのです。居心地の良くない言葉なのです。ですからそういう言葉はなるべく避けて、「私はあなたを愛しているよ」という言葉ばかりを一所懸命探す。聖書の中には愛のことばかり書いてあるから、愛の書物だから、私を困らせるようなことは言わないと自分で勝手に決めて、そうでない所を読むと、これは昔のユダヤ人にいった言葉であって自分には言っていないなどと考えるわけです。(アーメン・アーメン)

しかし聖書の神は私たちを人格的に育てようとなさる神ですから、不都合なことがあったらノーと言うのです。あるいは嫌だということ結構させるのです。「職務交換」で困ったときにはすぐ飛んで来る、あれが一番悪い方法なのです。困った時に悩まないことは、また同じ間違いをやることになるわけですから、困った所ですぐ飛んでいってはいけないのですけれど、すぐ飛んでいくのが天使なのです。天使は「職務交換」なのです。神は本来の解決を求めるのです。

なぜそんなことが起こったのかをきちっと解決しなければならないのに、「職務交換」に期待をしていたから、あの原子炉の「もんじゅ」でもうまく行くのだという神話に支えられてきますから、そうでないことが起こったときには、突発的なことで職務交換を出して、うまく片づけようとしたのに、うまく片づかなかったのが現実なのです。そのほか色々な所で、そのようなことが起こっています。何か自分たちの都合の悪いことは、うまく隠してしまい、都合のよい所だけ見せておけば、何とか事はうまく運んでいくのだという発想もあるわけです。

そういう発想に対して神は「都合の悪いのもあるのは、あなたがたが造られた存在で、完全でないという証なのだから、それはそれでいいじゃないか」とおっしゃる。むしろ「それにもかかわらず愛されている」ということに、しっかり目を留めていなさい、とおっしゃるのです。

「愛することは、決して誤魔化したり、かばったり、私たちに対して正しさを主張しなくてもいいよ」とおっしゃるわけではないことを、もう一度しっかり捉え直して置くことが大事なのだと思います。<sup>74</sup>

神の聖さとか、義というものは、そういう意味で私たちにとっては大変辛いもので、きついものです。

しかし、もし神が聖くなく、義でなかったならば、そんな方に造られた私たちは一体どうなるのだ、ということになるわけで、神が聖く、義であられるゆえに、その方に造られたという意味があるわけですから、やはり神の聖さとか、義というものに対して本当にしっかり目を向け、それゆえに与えられる愛の大きさ、尊さ、真実さというものをしっかり受け止めて行かなければいけないと思います。

愛と義が伴う神の愛が、イエス・キリストの十字架を通してでしか与えられなかったことがすごく大きな問題なのです。

そのことを無視し、神の義や、聖さを度外視してしまい、神の愛だけを受けようとするならば「キリストの十字架」はいらないのです。十字架のない信仰になってしまいます。やはり私たちはイエスを十字架につけた存在として自分の罪を認識しながら、それにもかかわらず愛してくださるキリストの愛にすがって、神の前に立って生きてゆくということが大切なのです。（キリスト論の王道に入ってゆかれます）

キリストが来臨なさって以後、私たちはもはや、私たちの願いや思いを風のように早く神に伝えてくれる天使は必要なくなったのです。

かつては被造物がそれをしたのに、今は神の子であるお方が、それを担ってくださっているとすれば、その執り成しの方がどんなに完璧であるか、私たちは思わなければならないのです。

その意味で「御子は天使にまさる」という、勝ち負けの問題ではなく、あなたが今、赦され、支えられ、愛されている、その神のあなたに対する仲保のお仕事は、天使に勝った完璧なお仕事なのです、ということをごここでは語っていると捉えていただいてよいのではないかと思います（1996年2月10日）

#### 写者記

当時根強く残っていた「天使礼拝」に対して、正しいキリスト信仰を根気よく伝えるとともに、一切妥協のない「イエスをキリストとする」信仰の原点に戻りなさいと勧告している。現代の私たちの周りには「天使」に代わる「恵み」という多くの偶像からの誘惑がある。しっかりと見極めて「十字架の信仰」に立ち返れと松山幸生先生は聖霊に満ちて叫ばれている。私のような者をよく知ってくださった故に激しく勧告して下さっている。感謝

#### 山谷省吾（1889-1982）

岡山県出身。東京帝国大学卒業。第四高等学校教授、第三高等学校教授、京都帝国大学講師、1937年(昭和12年)「パウロの神学」で京大文学博士。1945年(昭和20年)より1951年(昭和26年)まで日本基督教団信濃町教会の牧師を務める。1955年(昭和30年)東京神学大学教授、1975年(昭和40年)東北学院大学教授。新約聖書改訳委員として口語訳聖書の完成に努めた。